



Pigs and Boars —A Study on the Use of Domesticated and  
Wild Animals From the Standpoint of the Li Tribe of Hainan Island—

## 西谷 大

はじめに—問題の所在—

- ① 海南島におけるブタの出現
- ② 中国的集約農耕と黎族のブタ飼養
- ③ 海南島の焼畑と狩猟の歴史
- ④ 黎族の生業からみた焼畑、狩猟、家畜の関係

結論にかえて—焼畑とブタ—

### INDEX

日本列島において、ブタは大陸からもたらされた可能性が高い。しかしブタを農耕に取り込むといった特異な循環システムをもつ中国的集約農耕は、弥生時代およびそれ以降の日本の歴史においても、琉球列島を除いた日本列島には存在しなかった。またブタ自体も奈良時代以降は飼養しなくなるという歴史をもつ。本稿ではこの問題を、海南島のブタ飼養の歴史と、黎族のブタを重要視しない生業システムと比較しながら論じた。

海南島において、黎族がブタを日常的に飼養するのは明代に至ってからだと考えられる。その要因は海南島における大陸からの漢族移住による人口圧のためのブタ肉の需要拡大が背景にあり、黎族にとっては鉄製品や塩の交換品としてのブタの付加価値が、ブタ飼養を受容した要因だったと推測できる。

しかし黎族は、中国的集約農耕によるブタ飼養方法は受容しなかった。そのかわりに、水田、焼畑、狩猟採集、家畜といった生業を複合的に維持しつづけた。その特徴は、焼畑という自然界に作られた「大きな罠」を利用し、野生動物を日常的に狩猟するシステムを農耕内部に作り上げたことにあった。これが人為的な循環システムに頼る中国的集約農耕とは大きく異なる点であり、またブタをそれほど重視しない生業を維持することが可能な要因だったと考えられる。

琉球列島を除く日本列島の農耕は、海南島の黎族と同様に中国的集約農耕へと向かわなかっただけでなく、大陸の中国的集約農耕が卓越する地域ではすでに消滅した焼畑を、戦後の1970年代までおこないつけた。日本列島における焼畑がどこまで遡るかは今後の研究課題であるが、日本のブタ飼養の問題をとりあげる場合、焼畑が有する野生動物の多様な利用に注目する必要があろう。